

# 第39回日本のうたごえ全国協議会総会

## 方針

## はじめに

うたごえ運動は2008年、創立60周年を迎える。

「うたごえは平和の力」「うたはたたかいとともに」「うたごえは生きる力」を合言葉に活動してきたが、憲法九条を変えて戦争できる国への策動が一層激しさをましている今、憲法をまもる正念場の年に一層活発にしていくことが求められている。あらためてうたごえ運動の理念と平和憲法九条について考えたい。

「平和で健康なうたを全国民に普及する」を目的にしている日本のうたごえ運動は、国民主権、恒久平和、基本的人権の尊重を原則とする憲法の精神を輝かせ活動してきた。憲法二十五条は「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」とある。しかし、九条を変え、日本が戦争する国になれば、軍事費の増大、そのための増税、福祉切り捨て、教育・文化の統制など戦前の歴史で明らかかなように、この条項も保障されない。

そういう国にしないために、そして、いのちが輝く社会をめざして、私たちは「うたごえは平和の力」と活動し、「人々の生活と闘いを創造の源泉」として歌を創り、広げている。

2006年は、憲法をまもり平和に貢献する日本か、アメリカに従って「戦争への道」か、この国の進路と国民生活の将来、そして世界の平和構築をめぐり、歴史的な節目の年となる。

うたごえ運動の理念と九条についてあらためて深め、九条をまもる運動を軸に、憲法を輝かせ、国民自身が主人公となる音楽文化の豊かな発展をめざす新たな決意を持って運動を進めていきたい。

今総会では、音楽の輝きで感動の輪を広げ、心を結ぶ文化（うたごえ）で人々を励まし勇気づけてきた活動に確信を持ち、一人から一人へ、さらにサークルで、地域、職場へと全国津々浦々に広げる06年方針、うたごえ創立60周年に向かう3カ年計画を決めたい。

## 私たちをとりまく情勢

被爆・戦後60年の大きな節目であったこの1年。被爆者や、戦争体験者が、その悲惨な事実を若者たちに語り、その思いを受け継ぎ、核兵器も戦争もない世界をめざす行動に多くの若者たちが日本でも世界でも立ち上がってきている。日本の良心ともいえる九人のよびかけでつくれた「九条の会」は全国の地域、分野、職場、学園に広がり、その数は4000を越えた。「音楽・九条の会」も立ち上げられ、専門家から音楽愛好家まで1月現在2000人を超える賛同を集めている。「すみやかな核兵器の廃絶のために」の新たな署名が呼びかけられ広島、長崎両市長をはじめ内外の著名な人々が賛同の声を寄せている。米軍基地の再編強化に対し、自治体ぐるみで反対に立ち上がっている。いくつかの世論調査によると、憲法九条を変えない方が良いという意見は過半数を超え、特に20代では60〜70%を占めている。

うたごえ運動は、多くの人々との共同のとりくみを大切にしながら、全国でうたを生みだし歌い広め、11月には被爆地広島で開催した日本のうたごえ祭典<sup>①</sup>ひろしま2005（以下、ひろしま祭典）で、「平和の力」「生きる力」のうたごえを世界に向けて発信した。そのフィナ

レ、地元の中学生らとともに歌った「ねがい」の大合唱シーンはNHK TVの番組でも報道され、大きな反響を呼んでいる。

今、日本は、アメリカの「力による世界戦略」に組みし、アメリカとの強い同盟関係が日本の将来にとっても最重要と考える財界と小泉内閣によって、「戦力の不保持」と「交戦権の否認」を掲げる憲法九条を改変することを中心に据え、「戦争できる国づくり」へ突き進んでいる。

戦争をする国には、そのためのハード（軍事力）、システム（法）、ソフト（人心）が必要とされるが、ハード面では自衛隊がアメリカに次ぐ戦力を保持するにいたり、システム面での法改正は「有事関連法」が次々と成立、残すは九条改変というところまで来ている。そして、ソフト面での「戦争できる国づくり」を大量のメディアを動員し、教育基本法を「改訂」するなどして推し進めようとしている。

さらに小泉内閣は、在日米軍基地を再編強化し、基地の被害や米軍人による犯罪が多発していても、税金を投入してまで手を貸し、一方、「構造改革」の名のもとで、無駄な大規模開発や大企業減税には手をつけずに、消費税など暮らしを切り裂く大増税が企てられ、医療・年金の改悪が追い討ちをかけている。JR福知山線の脱線事故や、アスベストの放置、耐震強度偽装事件などは、もうけ優先の政治や大企業の姿勢がどんな結果をもたらすかを示した。人件費削減による不安定な雇用が特に青年の中で進行し、社会的な格差がひろがり、「勝ち組・負け組」がお金を基準に計られ、子どもの世界にまで「マネーゲーム」が入り込んでいく。これらの社会的ゆがみのもとで幼い子どもの命を狙うなど、「いらいら」や不満の矛先が弱いものに向けられている。

国の内外からどんな批判を浴びようとも靖国参拝をやめない小泉首相を「かっこいい」ともちあげ、青年割引料金も設定した映画で、あの戦争を「国と家族を守るためのやむを得ないもの」と語らせる。文化予算が少ない中でも「美しい日本のうた」をと「活躍」する自衛隊音楽隊など郷土芸能や祭りでの彼等の進出ぶりも著しい。

こうした社会の動きの中で、社会の真実と今を生きる切実な思いを映し出し、人々のところに連帯と勇気を引き起こす文化や音楽、うたごえ

の役割はいつそう大きくなっていく。

日本の進む方向は世界に大きな影響を持っている。平和を願い、いのちを慈しむ多くの人々の中にわたしたちの「輝け憲法九条！いのち・暮らしをまもれ」のうたごえを届け、共に手を結び行動することを呼びかけよう。平和なアジアと世界を未来に手渡すためにさらに広く大きくしていく必要がある。

## 2005年度 活動のまとめ

方針へい）人々のねがいと結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、「みんなうたう会」を旺盛に展開し、「共に生きる町づくり・地域づくり」のうたごえを広げる。

### 〔1〕演奏・普及

被爆・戦後60年の年、被爆国から核兵器廃絶の声を、アジアの国々を侵略した戦争の歴史を再び繰り返さないとしみ出した平和憲法をまもり、いのちかがやく社会を、とこの1年、精力的に演奏・普及活動が展開された。その活動を、ひろしま祭典につなげ、被爆地から世界に平和のうたごえを発信した。それらの活動から特徴点に絞ってまとめとする。

#### 〈1〉平和・憲法九条をまもり・いかすうたごえ

〈全国4000余に広がった「九条の会」と連動して〉 全国で40

00を越える各地各分野の「九条の会」が発足した。うたごえでは、レガテ（大阪）、関西合唱団、北九州青い空合唱団、女性のうたごえコスモス（岐阜）などで九条の会が発足した。また、「音楽・九条の会」も9月に結成され、06年1月、大阪で発足コンサートが開かれた。各地の「九条の会」結成準備会、発足会での演奏、大阪のうたごえの独自街頭アピール、ピースパレードをはじめ、街頭、駅前、路上ライブなどで、「日本国憲法第九条」「あたらしい憲法のはなし」、「Love and Peace」「ヒロシマの有る国で」「ねがい」「その手の中に」「あの日の授業」などを演奏し、九条アピールを展開。数多くの曲も生み出された。

各地の「九条の会」発足により、様々なイベントが企画される中で、うたごえと地元の音楽家、音楽団体、合唱団との共同が大きく進んだ。東京・町田市での市内合唱団との共同、女性のうたごえコスモスでは他の合唱団と合同で「あなたが夜明けをつげる子どもたち」を県民集会で演奏。長崎のうたごえは「PACK9 (peace act cons titution keep)」野外ステージで31団体と共演。「WE LOVE9条みんなでうたごえフェスティバル埼玉」は20組が出演し、合唱、ソロ、バンド、コントで九条をアピールした。また、被爆60年、各地の平和コンサート、ピースフェスティバルなどの企画も、前面に九条がかかげられた。

〈被爆60年、いのち輝け憲法九条『平和のうた』募集〉「世界中に平和を、21世紀の羅針盤・憲法九条のうたを」とよびかけた歌の募集は、206曲が寄せられ、特選以下6曲が選ばれた。入選曲他、生まれた歌は各地で普及された。

〈語りと合唱による構成『平和の旅へ』〉修学旅行生に伝える演奏はじめ「長崎・平和の旅へ合唱団」が広げている「平和の旅へ」は、原水爆禁止世界大会・長崎「文化の夕べ」で全九州250人で演奏。この他、高校の平和学習の一環でも歌われた。

〈「ねがい」のひろがり〉広島の大州中学から生まれた「ねがい」は、インターネットを通じて世界中に広がり、ひろしま祭典では中学生をはじめ、ゲストの韓国・キム・ウォンジュンさんがハングルで、ナターシヤ・グジー&カーチャさんがウクライナ語で演奏し、さらに、ベトナム、シエラレオネなどで歌われる映像も流された。その模様と「ねがい」を追ったドキュメントがNHKTVで特集された。また、8月のアジアの風合唱団訪韓演奏に広島、兵庫の教師・中学生が参加。「うたごえ喫茶もしび」の春の大うたう会では若者1000人での「ねがい」大合唱をと企画されるなど、大きく広がった。

〈混声合唱組曲『悪魔の飽食』〉全国連絡会議でとりくまれ、公演地の専門家・音楽団体などとの共同を広げているこの組曲上演運動Ⅱ全国縦断コンサートⅡは、2月、高知センター合唱団40周年記念と合わせて第16回公演が行われた。三島市民平和のつどいで三島どんぐり合唱団が演奏、06年第17回縦断公演へ。鹿児島では06年九州のうたごえ祭典での演奏にむけ準備が始まった。

8月には、抗日戦争勝利60周年を迎えた中国で第二次中国公演が行われ、189人が参加。アジアと世界のために音楽を通して行動している日本人の存在を伝えた公演は中国のマスコミが一斉に報じた。

〈被爆・戦後60年に日米の架け橋、合唱組曲『ウミホタル―コスモブル―は平和の色―』〉千葉・館山の戦争遺跡を現代に伝える活動と教育・千葉のうたごえの2年がかりのとりくみが実り、組曲初演後、地元ウミホタル合唱団が発足した。

この他、平和音楽会では、被爆ピアノを迎えてのコンサート（北海道、兵庫他）、「平和の火」がとる福岡・星野村での平和祈念コンサートでは地元の中学生に歌い継がれる「この灯を永遠に」を「この灯を永遠に合唱団」（東京）などと合同で演奏された。神戸では非核神戸方式を

歌う「波よひろがれ」が普及された。

また、ひろしま祭典成功と連動させた（60万羽の折り鶴運動）は歌「鶴に願いをこめて」も生まれ、全国でとりくまれ、328992羽の折り鶴が広島に持ち寄られた。

### 〈被爆60年・核兵器廃絶のとりくみとうたごえ〉

3・1ビキニデー、NPT再検討会議ニューヨーク大集会、国民平和大行進、原水爆禁止世界大会と、被爆60年の05年は、核兵器廃絶のとりくみも、多くの青年たちの参加と共に大きく発展し、「核も戦争もない公正な世界を」の世論は世界共通のものになってきた。

うたごえは、ひろしま祭典へ向けてのとりくみと合わせ、「この年にこそこの歌を」の思いで、被爆の実相を、被爆者援護のたたかいを、新たな被爆者をつくらぬ決意を歌い広めてきた。東京・上野での6・9行動に、学校の合唱祭に「ヒロシマの有る国で」を歌って参加する高校生が飛び入りで演奏するなどの広がりを見せている。

世界大会―広島では、3000人が参加した「世界青年集会」や青年の分科会第2部として青年自らが企画し運営する「青年のひろば」にうたごえの青年たちも積極的にかかわり、その成功に貢献した。「ねがい」をはじめ反核平和の歌が国外からの参加者やアーティストとともに演奏された。

長崎のつどいの第2部「文化の夕べ」は、世界大会の主催行事として開かれ、長崎・九州のうたごえを中心とする「平和の旅へ」の大合唱は渡辺千恵子さん役の景色ともゑさんの朗読もあり、海外代表のスタンディングオペレーションを受けた。日本のうたごえ合唱団による集中した演奏、04年日本のうたごえ祭典・沖縄でつながった読谷村の子ども獅子舞など、企画制作にうたごえがしっかりとかわり、被爆60年の世界大会を文化的にも充実したものととして成功させる上で大きな役割を果たした。

\*被爆60年、平和・憲法九条を軸に様々な活動、特に九条の会での

演奏依頼に応える活動が展開されたが、「改憲」の側の文化戦略も映像・メディアを駆使して進められている。これを取り越える、九条の輝きを発信し、共同の輪を作っていく活動が急速に求められている。

### 〈2〉働く者の声と

神戸青年合唱団らうたごえも支援してきた27年に及ぶ川崎重工争議が一括勝利した。05年、約100件の賃金差別、不当労働行為の争議が勝利している。

職場を暮らしをよくしていこうと歌が作られ広められた。各サークルがコンサートを開いている保育のうたごえはそのなかで会員を増やし、国鉄のうたごえでは祭典を機に、国鉄北海道合唱団が誕生した。大阪府庁うたごえ合唱団40周年、通産のうたごえ50周年のコンサートが開かれ、電通西南コーラスはうたごえを定期的に開催している。三多摩青年合唱団は横河電機の「成果主義制度」導入の実態と矛盾を音楽構成にして、春の音楽会を開いた。

現役を励ます職場のうたごえOB合唱団の活動、職場の枠を越え、新たにうたごえに参加する人を迎えている「OH！人生男声合唱団」（愛知）、労働組合事務所が集まるビルのホール（都内・大塚）で年4回開催の「大塚のうたごえ酒場」は「歌が取り持つて人と出会える場」として職場・地域に広がっている。

働く者の権利を掲げ、18年の裁判を闘った電通長岡事件原告近藤芳子さんを歌う合唱組曲「母さんの樹」が初演地新潟で26年ぶりに再演された。闘いの歴史と息吹を再び、と70人の合唱隊、若い音楽家たちとの協同で開催、公演成功後、合唱団「樹」が誕生した。公演をひきつぎ群馬で、NTTストラ反対裁判裁判の判決前にと原告、群馬子どもの人権宣言合唱団を中心に06年7月、「母さんの樹」公演が準備されている。

〈春闘・メーデーとうたごえ〉暮らしを守る国民春闘、総行動などでメーデー歌集が普及され、「8時間ソング」「憲法九条五月晴れ」などが広く普及された。大資本の牙城トヨタ本社前での1500人集会にはトヨタ車体労働者うたう会ははじめ愛知のうたごえが「トヨタかぞえうた」を広めた。岩手では労働者合唱団を結成して「地底のうた」が、沖繩メーデーでは基地反対と合わせて「わたしの平和憲法九条」が普及された。職場にうたごえを起こす、地域にうたごえを届ける活動（メーデー歌集）のとりくみの典型は05年も団で2500冊普及、南部合唱団（東京）の活動がある。年頭のあいさつとしてメーデー歌集普及を位置づけ、班体制で地域・職場に入り、そこでの声、要求を聞き、昼休みデモ、新人歓迎会、集会、イベントに歌を届けている。こうした活動を音楽づくり、定期演奏会につなげている。

地域・職場からうたごえを起こす活動は、職場のうたごえの高齢化が進むなか、また、フリーターなど未組織労働者が増えている今、ますます重要になっている。

### 〈3〉暮らしの中から

〈子どもの未来を育むうたごえ〉憲法改悪と一体となって教育基本法改悪案が出されている今こそこの歌を、と「子どもを守るうた」の大合唱が呼びかけられた大阪では、教師、退職者、保護者に広げられている。

合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」は、オーケストラと上演の栃木はじめ、和歌山の御坊市と海南市など各地の平和コンサートで、学童保育全国大会（神奈川・1000人の合唱）で、保育実践にうたごえをとりいれている鳩の森愛の詩保育園（神奈川）開園20年コンサートの園児、保護者、保育士の大合唱など05年も大きな広がりを作った。愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団によって作られた学童保育の歌でCD「放課後のおうち」が発行された。

「平和を愛する子ども・大人を育てよう」と活動する二本松はじめ、中山譲さんら「つながりあそび・うた」は、全国での講習会をはじめ、保育園、幼稚園、学校などに広がり、保育のうたごえとも連動して歌の輪を広げている。

〈母親運動とうたごえ〉05年日本母親大会（茨城・ひたちなか市）では、地元の詩人野口雨情をテーマに「雨情を歌う合唱団」を結成し、県下3カ所で練習会を開き170人の合唱団で演奏された。また、紫金草を広めた地元での開催に全国の紫金草合唱団による「紫金草物語」も演奏された。この他、群馬、愛媛、福岡をはじめ各地の母親大会のうたごえ運動、うたごえ分科会が行われた。

〈ますます盛ん高齢者のうたごえ〉「胸に9の文字」、テーマソングは「長生き節」の年金者組合うたごえサークル「こだま」（埼玉）誕生。日本シニア合唱団（東京）が加盟、独自コンサートも計画されている。青森もうたう会が盛ん、静岡・年金者組合が地元紙でうたごえ喫茶をよびかけると60人が参加。歌う要求が渦巻いている年金者組合では、日本のうたごえ祭典参加が一貫して運動方針に掲げられている。

〈生きる力・うたごえ〉スペシャルオリンピッククス（長野）で長野市内小学校の和太鼓クラブ、「麦っ子広場」と長野合唱団が出演。作業所運動との連携では、広島のうたごえのみじ作業所との歌作りをひろしま祭典「共に生きる街合唱団」につなげた。また、「平和のうた」募集で京都・宇治共同作業所のびのび班創作の「へいわのうた」が特選となった。

阪神・淡路大震災10年、中越地震1年の05年。慰問演奏を続けているMs.（京都）。被災地の神戸青年合唱団初演の組曲「いのち―大震災あれから10年」が東京の中学生に歌い継がれ、平和学習で演奏された。神戸市役所センター合唱団は、被災の翌年制作し歌い継いできた阪神大震災鎮魂組曲「1995年1月17日」を持って、10月、中越

地震被災者支援・小千谷公演を開いた。その活動は、「自らの被災の体験を歌で支援する団の演奏にうたごえの真髄を見た」（新潟・うたごえサークルたけのこ大口知子）、とうたごえの仲間も励ました。

\*毎週金曜日、駅頭で平和のうたごえを響かせている国鉄東京合唱団、月一回の駅前行動を始めた千葉・合唱団プリマベラの継続的な活動から、演奏・普及の原点を学びたい。強力な「メディア・コントロール」を跳ね返し、真にいのちがやく時代をつくるのは、感動する心を伝える合う日々の営みである。コントロールを打ち破る、ヒューマンな感動、伝え手を視野に入れた、豊かな演奏・普及活動はますます求められている。

## 「2」創作活動

05年度の創作活動は、「『平和のうた』募集」で国民的愛唱歌を作り出そう、との呼びかけで始まった。全国からの声も寄せ合い、特選「へいわのうた」、入選「ひとつのピース」はじめ6曲を選び、ひろしま祭典を軸に歌い広げてきた。また、昨年も、千葉、名古屋、京都の研究生うたの学校や青年、静岡TOMO、岡山のうたごえ、東京にんたま合唱部、産別の創作、東北創作センター、東京、京都、九州などの創作発表会ほか全国各地で旺盛な創作活動がとりくまれた。

なかでも、千葉県館山市の地域や行政のとりくみと結びついて運動を発展させる力となった合唱組曲「ウミホタル」のとりくみ、インターネットで世界中から300番にもなる歌詞が生まれた「ねがい」のうねりなど、うたごえの枠を大きく超えて広げられているとりくみは特徴的である。また、オリジナルコンサートで、生活とたたかいに根ざした多くの素晴らしい曲を発表した愛知の、創作発表会と創作曲集を毎年発行し続けてきた運動は全国で学び広げたい。

江ノ島での全国創作合宿（30人）では、門倉さとし、大西進、小林

康浩氏から学びつつ、集団創作で作り出す瞬間に立ち会う感動を味わい、新しい参加者をひろげてきたが、今後一層若い創り手を増やし育てていくとりくみが必要である。

また、全国の創作運動の結集の場、「オリジナルコンサート」をひろしま祭典期間中に開催。限られた時間の中での制約はあったが、全国から16団体43曲が発表され、話題になった曲がうたごえ新聞紙上で発表された。

今後の課題は、①もつともつと各サークルの一人ひとりが自己表現のスタートとして創作にとりくみ、歌い広げながら、産声を上げた作品を練り上げて育てていく作業を重視すること、

②各県・産別・階層のうたごえが創作運動に力を注ぎ、新しい創り手を育てていくこと、

③創作合宿やオリジナルコンサートの開催の工夫、

④日常的な全国の創作活動家の交流や学びあいを生み出す創作センターの確立、などである。

多くの国民の要求や願いに応え、生きる力と心をむすぶ魅力あふれる歌づくりと普及の運動を、一層力強くすすめるために、うたごえの総力を挙げた「創作運動」が求められている。

## 「3」アコーデオンの活動

アコーデオンの活動では、関東アコーデオン演奏交流会第17回が開かれ、東京、埼玉、群馬、神奈川、千葉から43人が参加。また、8月には日本アコーデオン協会主催「アコーデオンサマーフェスタ2005」が7日間開かれ、中国の青少年によるアコーデオンオーケストラが来日、演奏交流会も開かれた。神奈川のうたごえ祭典ではアコーデオン合同が行われた。西日本アコ仲間のつどい講座と交流会が行われた。また、うたごえ喫茶の伴奏アピールなども積極的に行われた。

催計画を持つ。

## 「1」日本のうたごえ祭典Ⅲひろしま

祭典は「被爆60年 輝けいのち・憲法9条」を合言葉に被爆地・広島で開かれた。ヘブリスウエーブコンサート）2000人、へのちのハーモニー）2500人、大音楽会（ヒューマンフェスタ）4600人、〈合唱発表会〉4500人、のべ13600人の参加者で、全国の連帯で成功させることができた。

祭典は、30年ぶりの「炎の歌」全曲演奏をはじめ、地元音楽家・団体の演奏、うたごえ合唱団の平和の思いを熱く伝えた（ヘブリスウエーブコンサート）、ライトアップされた原爆ドームの川辺で被爆ピアノとともに奏で、被爆者への鎮魂と平和を願ううたごえとなった（へのちのハーモニー）、郷土芸能・和太鼓の静寂と躍動、障害者も健常者も老人も子どもも一緒につくった「共に生きる街」、1000人を超える明日へのヒューマンボイス等全国の参加者とともに歌い交わした「ピースフル・ボイス」にあふれた平和音楽祭となった（ヒューマンフェスタ）。特徴ある3つの音楽会が織りなす平和のハーモニーは、「輝けいのち・憲法9条」の強い思いを、ヒロシマ・ナガサキから全国へ世界へ発信した。

祭典は、95年の広島での日本のうたごえ祭典から積み上げているピースウエーブコンサートとこの間の祭典の財産を实らせ、「憲法をまもり、核兵器をなくそう」の平和のうたごえを全国から起こし、歌って参加の地元・全国の創造的連帯の中で、被爆60年にふさわしい運動と内容で成功させることができた。

方針〈2〉地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い創造の前進をめざす合唱発表会にする。

## 「合唱発表会活動」

協議会活動の柱のひとつとして位置付け、開催地や、企画にも工夫を凝らしながら、サークル・合唱団の演奏交流、学びあい、高めあう場として合唱発表会が開催されている。

鹿児島で近年初めて、山形では鶴岡市で初めて開催、新しい参加団体を増やしている。また、全国青年交流会の中で初めて青年の合唱発表会が開催された。一方、開催ができなかった県もいくつかあり、ここ数年未開催の県と合わせ、年度当初から計画を持ったとりくみが求められる。産業別合唱発表会・交流会も、現役会員が減少する中でも、地域にも視野を広げたり、OBサークルの参加などの工夫をしてつづけられ、参加者を励ましている。多くの退職者が予定されているここ数年、産業別交流会の新たな展開の論議が急がれる。全国的な参加団体数は若干減少した。

全国合唱発表会は、一般A・B、職場、女性（親子）、小編成、交流の各部門とオリジナルコンサートが開催され、参加団体、参加人数とも近年最高となった。初めて開催された交流の部は、分野もジャンルも超えた多彩な演奏交流を実現し、参加者を感動させた。多くの聴衆の参加や、推薦方法、当日の進行方法なども含めさらに検討をしていきたい。

方針〈3〉地方祭典の全県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開

## 「2」地方祭典と産業別祭典

〈地方祭典〉京都は、京都のうたごえ55周年「55GoGo!フェスティバル」として、2日間借りきった右京ふれあい文化会館に「わたしの平和」ひと言メッセージを展示し、合唱発表会、PEACEコンサート、日本で一番長いうたごえ喫茶、居酒屋も開催。北海道&国鉄祭典は、国鉄の分割・民営化で北海道を離れた人たちが定年で故郷に戻ったのを機に、国鉄のうたごえ祭典とジョイントで開催。北海道は被爆・戦後60年、憲法改悪反対を合唱構成「未来に輝く星」で、国鉄は創作曲「故郷を紡ぐ銀河線」を中心にした構成を演奏。祭典記念合唱団はひろしま祭典全国合同につないだ。

九州祭典は、福岡初300人による「平和の旅へ」他、親子、障害者、保育者、労働者の大ステージで700人が参加。マスコミ各社後援、賛同団体60団体と市民に大きくアピールした。

広島祭典は第二部をひろしま祭典・ピースウェーブコンサート、大音楽会のシミュレーションで行い、祭典最終盤のステップとした。

福岡祭典は、荒木栄記念碑建立20周年記念と合わせ開催。「墓標」「子どもを守るうた」を演奏し、ひろしま祭典につないだ。

信濃祭典は、03年ながの祭典成功で県下にエネルギー。23年ぶりに松本市で開催。地元松本中央コーラスが中心となり、地域に呼びかけた合唱練習会も5月から開始し、1000人の合唱で「鶴」「大地讃頌」を演奏、ひろしま祭典へつないだ。地元紙も大きく報道。

神奈川祭典は、へかがやけいのち憲法9条をタイトルに「ぞうれっしや…」から職場、地域、高齢者と大舞台。神奈川のうたごえを支えるゲスト演奏、憲法をテーマに組曲「いのちのルール」、祭典合唱団「アメイジング・グレイス」など県下の力を集めた祭典となった。

〈地域祭典〉大阪・北部祭典は北部サークル協議会と北部センター合唱団のうたごえの枠を超えたよびかけに、270人が出演する祭典となった。東京・足立祭典は24回目。保育所建設運動の歌、東京大気汚染公害裁判支援・あおぞら合唱団70人など市民運動、文化運動が集う場もある。

他にも、合唱発表会を祭典として開催されている所もある。また、兵庫では毎年の「グリーン&ピース」コンサートを、東京は第3回「夜空にうたう夏まつり」を開催。日本のうたごえ祭典開催以後の福岡、長野、5年ぶりの神奈川など、大きく広げたとりくみはうたごえ祭典ならではの教訓を示している。

〈産業別祭典〉港湾祭典は、港から戦争への道を止める構成「俺たちは戦争にはいかない」を演奏。

教育祭典は北九州のサークルエデュカスを中心に200人の「ぞうれっしや」や「子どもを守るうた」など地域に広げた。

私鉄祭典は45歳以上賃金カットの劣悪労働条件を変え、公共交通は福祉と構成「A(えく)列車で行こう」を演奏。

自治体は合唱発表会と声楽発表、パイプオルガン演奏の鑑賞を行った。国鉄祭典(地方祭典の項)。

電通祭典は、職場の実態をコミカルに描き、一人ひとりが勇気を出してものを言おうと構成「ダイヤとビー玉パート7」、1000人の組曲「自由なる朝へ」を演奏。

郵便祭典は郵政民営化へと揺れる中で、公共の福祉を守る郵便をと新曲「走れ未来にむかって」を演奏。

保育は合唱交流会に7月の全国保育団体合同研究集会・広島300人のステージから41人が参加、ひろしま祭典へ。

医療祭典は「すべて国民は―日本国憲法25条―など構成「守ろういのち」を演奏。北海道・ミニデイホームのうたごえ会きずな初参加。

\*この他、6年ぶりの大阪自治労連のうたごえ祭典は17単組が出演、23のステージで480人が参加。職場の思いを歌で交流し、そのつながりを意識し、来年も開催される。産業別祭典でも憲法が歌われた。職場と地域をつないで、広く市民に呼びかけて成功させた教育のうたごえ、地方祭典の成功例から学びたい。



「うたごえ新聞創刊50周年」を内外にアピールする1年として、歌の広がりやうたごえ新聞につなぎ、豊かな「うたごえ発」を確立する。

## 「うたごえ新聞、季刊『日本のうたごえ』」

うたごえ新聞05年は、「憲法が生きる21世紀 被爆・戦後60年のち輝く2005年」を基調に編集。4月に創刊50周年、11月に創刊2000号を迎え、歴史を振り返り、新たな出発へのステップとした。

創刊50周年キャンペーンでは、音楽家、識者、文化団体からのメッセージで「民衆発 音楽シーンを拓く」を特集。4月10日の「創刊50周年記念レセプション」は全国から154人の参加を得、東京で開催。記念トークには本紙連載執筆者、作曲家の池辺晋一郎氏とジャーナリスト伊藤千尋氏を迎え、「歌は訴え、新聞は『元氣』をリード」「社会変革の裏に歌」など、うたごえ新聞の存在意義をあらためて伝える場となった。2000号は、本紙を応援する若いリーダーたちからの激励を得た。

年間を通して憲法をまもるうたごえアクションを紹介。また、改憲の本質に迫る識者からの提言や音楽創造へのアプローチとして、鳥越俊太郎、秋葉忠利、高遠奈穂子、松元ヒロ、斎藤貴男、岡田尚、山崎朋子、肥田舜太郎、松原徹、ジェームス・デプリースト氏らの紹介は、文化の発信者として、時代を見つめる目を示す材料を提供した。

被爆・戦後60年・ひろしま祭典企画に、「くまさんの まつとるけくきんさいよ」をはじめ、ひろしま祭典運動を喚起し、被爆60年ヒロ

シマを学び直す連載を行った。新企画は懸案の批評活動を活発にするため、音楽評論家小村公次氏による「音楽時評 読み書き 語りあうために」を開始した。

通信・情報提供活動では長野、宮城などから新しい通信者が生まれ、うたごえ新聞編集局が稼働し始めた。うたごえ新聞の自身を直接伝え、地方編集会議として位置づけている「うたごえフォーラム」は50周年キャンペーンと合わせて6県で開催。開催地での送稿、読者増につながっており、全県開催を急ぐ必要がある。

「季刊『日本のうたごえ』」は、理論学習にと位置づけ、05年度は被爆・戦後60年、憲法改悪の動きの中で、運動の進め方を示唆する講演や座談会を特集した。「被爆60年によせる文化・音楽 うたごえ運動への期待」（安斎育郎）、「憲法『改正』へのねらい」（姜尚中）他。また、浅井敬壹世界合唱シンポジウム京都実行委員長の登場、手引きとして活用できる「作詩の話」「作曲の話」の創作特集を組んだ。

3カ月発行のサイクルを生かした特集企画、運動内外の論文など、長期展望にたった編集企画が課題である。

「方針へ5」うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる。

## 「事業・出版普及活動」

現在事業部として出版物を普及している団体は約100団体、年間約850回の販売対応にとりくんでいる。出版物の普及は歌って広げることと合わせて、うたごえ普及のもう一つの手段であり、また財政活動の

点からも、加盟団体の事業部確立を重視していきたい。

「憲法・平和」のコンサート・うたう会など全国的に展開され、03年11月3日から始まった「憲法大好きコンサート」はきたがわてつさんの出演だけで178回、推定186000人に「憲法のうた」を届けられた。憲法賛歌「わたしを褒めてください」（ジェームス三木詞）が急速に広がり、CD「TETSU」も好評である。

全国的には4つの歌集の普及をとりくんだ。春闘、メーデー、諸集会には「メーデー歌集」、憲法、平和のつどい、平和行進などには「憲法・平和歌集RIBBON」、ひろしま祭典とタイアップしたソング集「うたうたうた05」と1000人のヒューマンボイス成功への合唱曲集「アメイジング・グレイス」を、目的、用途別に普及した。「05メーデー歌集」は労働組合、実行委員会からの注文も少なからずあり、「歌う活用」を重視することで、前夜祭、メーデー歌覚える会、メーデー当日のうたごえ行動など一定改善され昨年を上回った。祭典関連の二つの歌集は練習会、うたう会で活用され、特に合唱曲集は3200冊普及で祭典成功の力になった。

音楽センター出版物では、保育、教育、手話などが主力になり講演会、カレッジなどに多数の参加がある。各地の運動と一体となったとりくみは今後に大きな可能性を持っている。

各合唱団、個人の自主出版も活発に行われ、これらの各出版紹介、交流も大切である。

方針へ6)歌う喜びを出発点に、いのちの輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を進展させ教育・学習活動をすすめ、21世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる。

## 「教育・学習活動」

全国合唱講習会は、西日本が広島市で、東日本が東京都で、それぞれ110人余の参加で行われた。祭典合同曲を講習曲に取り上げて祭典イメージを広げ、大合唱で歌う喜びも深めた。また、西では猪原龍吉氏による交響曲「炎の歌」より「石」の思いの深い合唱指導は感銘を呼び、東では岩本達明氏の楽しむ確かな合唱指導を体感した。これらの合唱講習会の成果をさらに推し進めるためには、歌い手との学びあいも含め、指揮者・指導者の一層の努力が不可欠である。

全国指揮・合唱指導講習会は松本市で90人余の参加で行われた。従来、「教育講習会」と呼んでいたが今年度から「指揮・合唱指導講習会」とし、「合唱指導法」という認識を高めて指揮者・指導者だけではなく歌い手としても参加して学び合おうと、指揮法特別講師に梅田俊明氏、合唱特別講師に本山秀毅氏を招いて事前の準備も含めとりくみを強めた。指揮課題曲としてひろしま祭典合唱曲集を使い、全国合同合唱への参加、各地、各合唱団での練習、演奏の成功につなげた。また、第20回を記念して成果発表音楽会を開き、好評であった。今後さらに運動理念の学習や、音楽講座のあり方などの検討を進めながら、継続的に受講者の参加と内容を高めていきたい。

指揮者・合唱指導者会議は、当面登録活動を進めることにしたが十分に終わった。

2005年日本のうたごえ合唱団が138人で結成され、原水爆禁止世界大会長崎のつどい・文化の夕べ、ひろしま祭典・音楽会での出演、名古屋での新春合宿、東京・大阪・長崎での練習会、などの活動が展開された。客演指揮に浅井敬壹氏を迎えて大きな刺激を得た。うたごえ運動の音楽創造の一つの到達を示すと共に、参加団員相互の交流と体験が各地での演奏創造の励みとなっている。2006年度合唱団の募集も行われ112人で結成、活動が開始されている。

北海道、九州ではブロックとしての合唱講習会が継続してとりくまれ、静岡ではうたごえ協議会主催で連続講座が開催されるなど、ブロックや協議会の連帯したとりくみとして祭典参加や音楽創造で成果を上げてい

る。三多摩青年合唱団ではオペラ「森は生きている」を研究生修了音楽会で上演することを打ち出し、インターネットなどでもよびかけ、高校生、大学生、保育士、労働組合書記長など2桁の青年が研究生に参加している。また関西合唱団の日曜講座も新しい音楽家とのつながりを含め学習活動として学ぶところは大きい。

60周年を迎えるうたごえ運動のすぐれた経験を受け継ぎ、国内外のすぐれた音楽に学び、創造活動、運動理念の両面での学習教育活動を充実させ、新たなリーダーを生みだしていくことは運動の発展にとって不可欠である。

~~~~~  
方針へ7) 青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、21世紀をになう青年をたくさん迎える。

## 「次代を担う青年の活動」

歌いたい、学びたい、つながりたい、働きたい、平和な未来で生きたい、青年自らの要求の高まりのなかで、青年のうたごえは活発に活動している。

東京では、分野、運動の枠を越えて青年たちが恒常的に交流し、中央メーデーで青年のひろばを実現したり、原水爆禁止世界大会の青年企画を作る中心になるなどの動きが活発になった。兵庫では平和と九条をテーマにしたピースフェスタを2000人を超える参加者で成功させるなど、その中でうたごえにかかわる青年が重要な役割を果たしている。愛知では青年のうたごえが独自のコンサートを成功させた。各地の祭典や、交流会などで青年企画が実現している。

全国青年交流会は、神戸で関西ブロック交流会と共催の形で開催され

(71人中青年39人参加)、その中で初めて青年の合唱発表交流会が行われ全国推薦もできた。

ひろしま祭典の青年合同では今年も青年の創作曲が歌われ、この間の音楽づくりの成果をさらに発展させて来た。創作ダンスが披露されたのも特筆される。開催地への事前のアプローチなどでは課題も残したが、今後も地域ブロックを単位に連帯していきたい。

青年学生部員が青年のうたごえのネットワークの中心として一定の役割を果たし、うたごえ新聞の「青年欄」も集団で紙面づくりを試みるなど、新たな展開を見せている。

現在の青年が、運動の中心的な担い手となって活動し、さらに新しい青年を大量に迎え入れるためにも、青年向けの教育・学習活動の充実が重要である。各合唱団の研究生活動を充実させる一方で、協議会単位での学びの場を考えていく必要がある。また、さまざまな講習会に青年を意識的に送り出すとりくみも強めたい。

06年、初めて開催される「全国青年のうたごえ祭典 in Tokyo」  
o f フォルテー大きくうたえ」にむけて、準備が始まっている。

~~~~~  
方針へ8) サークル・合唱団づくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

## 「団員拡大、サークル建設、協議会確立と加盟を増やす」

歌うこと、踊ること、自らの思いを表現したいとうたごえの輪の中に加わる人が増えている。

うたごえ喫茶では、常に3桁の参加者で盛況なところも少なくない。

東京の年金者文化祭には10数団体の合唱グループが出演しているなど、年金者運動や女性運動などでは、各地にサークル・合唱団が生まれている。東京・足立ピースフラワー合唱団では地域に根づいた活動を旺盛に展開する中で大きく団員を増やしている。歌いたい要求を機敏につかみ、協力共同の関係を強め、サークル建設、協議会強化につなげる意識的などとりくみが求められる。

ブロックの連帯活動は、各県の協議会の活性化、協議会がない県などで新たな運動をつくる上で大切な役割を果たしている。祭典を持ち回りで開催している北海道、九州では、その開催地のうたごえが大いに力を発揮すると共に、連帯のとりくみが全国祭典の参加運動とも結び前進し、九州では新たな加盟団体を生んでいる。東北は20数年ぶりに青森での交流会開催を決めた。

産業別協議会があるところは祭典、合唱創作発表会が全国規模で開催され、参加者を励ましている。

一方で、歌いたい、表現したい要求はあるがリーダーや伴奏者がいなくてサークル化ができない状況も見られる。地域、職場、学園にサークル・合唱団を組織すること、そのためのリーダーづくりは急務である。

地域や産業別の祭典や合唱発表会には参加しているが全国協議会に加盟していないサークル・合唱団が未だ少なくない。これらの団体が全国協議会に加盟することで、うたごえ運動はさらに全国的な影響力をひろげ、その団体の発展にとっても大きな力になる。一番身近な仲間を迎え入れながら、運動の基盤であるサークル・合唱団建設、加盟促進を60周年を迎える運動の柱として位置づけたい。

#### 〈うたごえ新聞読者、季刊「日本のうたごえ」読者拡大〉

創刊50周年を迎えたうたごえ新聞は、総会方針の「創刊50周年レセプションの4月10日までに新読者1000人を迎える」ことを、全国の大運動で達成した。常任委員会の深い決意と、運動にふさわしい体制、財政措置をとり、ニュースも連続して発行するなかで、各地で読者拡大の先頭に立つ人が生まれ、短期間で達成できたことの意義は大きい。

この教訓をいかし、担当者任せにせず、読者とのつながりを密にしたとりくみが求められている。

今、うたごえが大いに注目され、さまざまな分野で共同のとりくみが広まっているとき、音楽文化ジャーナルとしてのうたごえ新聞が果たす役割は大きい。情勢と運動の規模にふさわしい読者数を確立するとりくみが求められている。

季刊「日本のうたごえ」は独自のとりくみの弱さもあり微増にとどまっている。今一度、季刊「日本のうたごえ」の位置づけを明確にし、「学ぶ」ことを大切にしながら会員全員の購読を追求する必要がある。

#### ~~~~~ 方針〈9〉世界の音楽家、音楽団体との国際交流を広げる。 ~~~~~

### 「国際交流」

日本では被爆・戦後60年の昨年、アジアの国々では、日本の侵略からの解放60年の記念の年であり、また、ベトナムではアメリカの侵略からの解放30周年の年でもあった。これらアジアの国々との草の根の文化交流が盛んに行われた。

04年のアジアの風フェスティバルの成果を発展させる形で、韓国へ、5月に「5・18光州事件」25周年アジアンマダン、8月には1000人を超える代表団を日本AALA、東京労音との共同でおくり、光復（解放）60周年の国家行事に演奏参加したのをはじめ、国鉄のうたごえ中心のベトナム解放30周年記念ツアー、「悪魔の飽食」全国実行委員会主催の第2次中国公演、長野、大阪を中心とした光の種子をうたう合唱団の訪韓公演などたくさんの方の演奏交流が行われた。

また、ひろしま祭典では韓国からキム・ウォンジュンさん、ウクライ

ナノナターシャ・グジーさんが妹のカーチャさんと演奏、京都ひまわり合唱団の演奏会にサム・トウツ・ソリのメンバーでもあるソン・ビョンヒさんを招くなどの交流も行われた。

日本の侵略戦争を肯定するような動きが強まる中で、アジアの国々の人々と市民レベルで平和のための交流を盛んにすることは、アジアの平和、世界の平和の大きな力になることを確信した。また、これらの交流の参加者が、日本の中で、歴史の真実を語り、あの侵略戦争の反省から生まれた憲法九条をまもる世論を大きくするためにがんばることをあらためて決意させるものとなった。

和太鼓、民謡・民舞の分野でも国際交流が盛んになっている。

方針へ100）和太鼓と民謡・民舞のネットワーク化とシステム化を促進する。

## 「郷土のうたと踊り」

ひろしま祭典全国郷土合同として発表した「生命の詩」を作曲の今福優さんのリードで成功させることができた。「生命の詩」講習会として地元広島をはじめ、兵庫（約30人）、東日本でも特別講習会として（約40人）実施したが、その多くが祭典参加にまで結びつかなかったのが反省点としてあげられる。

本年は東日本でしか開催できなかった「郷土のうたと踊り講習会」（170人）では、「銚子の早打ち」を地元保存会から、また「荒馬」を東京のプロ民族歌舞団「荒馬座」を講師に迎えるなど、つながりを広めながら成功させてきている。

また、東日本では10年来のとりくみとなっている「江戸やっこまつ

り」を開催、初参加のチームも多く、年々充実してきている。兵庫では、和太鼓と民舞の祭りを開催した。プロチームとの連帯活動が発展してきており、神戸の太鼓衆団輪田鼓は、震災10年を祈念してプロ集団「わらび座」と「田楽座」との三者による「ふるさとのにぎわい」を開催。川崎では、風チームからメンバーを出している荒馬座公演をとりくみ、田楽座にメンバーを送り出した跳鼓舞では、田楽座調布公演の準備に入っている。

これからの郷土活動の課題は、専門家との創造連帯と教育指導、全国講習会の充実、郷土センターの設立、情報・教育者・楽譜整理・記録・創作等々の体系化、郷土教育者の組織化、メニュー化、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりプランとしての計画が考えられる。

和太鼓・民舞仲間をうたごえの輪の中に迎えるとりくみも大切にした

## 2005年日本のうたごえ祭典三ひろしま

総括

2005年日本のうたごえ祭典三ひろしま実行委員会

### I.はじめに

”被爆50年 輝けいのち・憲法九条”。2005年日本のうたごえ祭典三ひろしま（以下、ひろしま祭典）は11月4〜6日、広島グリーンアリーナを主会場に、7部門の合唱発表会、オリジナルコンサート、

3つの大音楽会に全国・地元のべ13600人が参加し、大きな感動をのこし成功させることができた。

4日、音楽会へ「ピースウェーブコンサート」は、厚生年金会館ホール2000席を満杯にした。迫力あるうたごえ合唱団の平和をもとめる演奏と、細やかな表現で人々の感性に迫る独唱やピアノ演奏、地元の優れた芸能など、平和の波にふさわしい音楽会となった。

5日、野外音楽会へ「いのちのハーモニー」。ライトアップされた原爆ドーム前、元安川に揺れる灯籠の光と被爆ピアノの音色は、この年・この地にとどい歌う意味を、2500人の参加者が感じることができた荘厳なコンサートであった。

6日、大音楽会へ「ヒューマンフェスタ」は、グリーンアリーナで行われ、4600人が参加した。このヒューマンフェスタは、被爆時、市内を流れていた7つの川をイメージし、生命の讃歌・核兵器廃絶・平和国際連帯・郷土芸能を7つの構成にした、歌と太鼓と踊りによる魅力的で感動的な大音楽会を作り上げた。

ひろしま祭典は、被爆・戦後60年という節目であったと同時に、平和憲法がおびやかされる中、“うたごえは平和の力”という言葉の意味をあらためて実感した多くの人々の共感と連帯で成功した。

2004年8月6日、広島市は平和宣言の中で「核兵器のない世界に向け、被爆60年の来年までを、記憶と行動の1年とする」と宣言した。日本のうたごえ祭典「ひろしまは、平和宣言を实践した音楽会として歴史に語られるだろう。

祭典を成功に導いた地元の多くの支援者、支援団体、全国のうたごえの仲間から感謝したい。

## II. とりくみの経過

### □ひろしま祭典開催決定

04年5月、2005日本のうたごえ祭典の広島開催の検討に入った。祭典まで1年半だった。幸い11月初旬連休の会場確保の見通しがついた。被爆60年の節目の祭典として被爆地広島から発信する重みと、95日本のうたごえ祭典「ひろしま」へ「ピースウェーブコンサート」にはじまったこの10年のピースウェーブコンサートの蓄積を生かせば可能であると、6月、広島のうたごえ協議会において開催を決定した。

### □企画「夢語り」とアピール

7月のピースウェーブコンサート、夏のかずかずの平和のとりくみをはさみ、長野や沖縄の祭典を念頭において広島でどういう祭典にしたいかの夢語りを打ち上げ等々さまざまな機会に展開され、実行委員会準備会が立ち上がる10月には祭典企画アトランダム案としてまとめられ、祭典のイメージが膨らんだ。この準備会（うたごえ協議会5団体プラス2団体20人）が祭典運営委員会として活動をすすめた。

一方、広島合唱団はこの年、団創立50周年を迎え、記念企画として団史制作、記念レセプション、記念CD「ねがい」制作、記念演奏会（05年3月）の4つの事業をすすめていたが、レセプション（12月）は213人の参加を得て、うたごえ祭典の開催を内外に大きくアピールする場となった。

全国企画懇談会（12月）で祭典の骨格が固められ、企画の大枠が方向づけられたのをうけて、05年1月、祭典全体のレイアウトを構想した。

### □基本方針案の決定

05年1月25日、第1回実行委員会を15団体29人で開催し、以下の企画構想、祭典・3つの音楽会構想、組織活動方針でとりくむこととなった。

### 【企画構想】

①被爆・戦後60年、21世紀の羅針盤・憲法9条をめぐる節目の年

に、「うたごえは平和の力」を合言葉にすすめてきたうたごえ運動の蓄積を、運動内外の広範な人々と共に創りあげる祭典にする。

①「被爆60年に向けて被爆の記憶を呼び覚まし、体験の継承や共有を通じて核兵器廃絶への“希望の種”を蒔く行動の一年にしよう」(2014年広島平和宣言)の呼びかけに応え、「広島が目指す“万人のための故郷”には豊かな記憶の森があり、その森から流れ出る和解と人道の川には理性と良心そして共感の船が行き交い、やがて希望と未来の海に到達」するという宣言に盛り込まれたひろしまの夢を企画に生かし、夢をかたちにする手作りの祭典にする。

③「オキナワ―ヒロ・ナガ―第9条」を合言葉に、いのちの輝きと平和への願いを歌いあげる祭典にする。

④広島そして瀬戸内の自然・風土、そこに息づく人々の願い、未来をになう青年そして子どもたちの姿がいきいきと躍動する祭典とする。

### 【祭典 3つの音楽会構想】

祭典では3つの音楽会をとおして、いのちの讃歌・平和へのねがい・希望のうたごえが幾重にも鳴り響くことを基調とする祭典構想が提起された。

祭典初日には毎年夏に催している〈ピースウェーブコンサート〉を置き、世界に被爆60年・ヒロシマのメッセージをきっちり届ける音楽会とする。また、地元と全国からの参加者がともにいのち輝かせて歌い楽しみ希望を分かち平和音楽祭として、大音楽会〈ヒューマンフェスタ〉を祭典最終日に開く。そしてその中日を、コンサートでもフェスタでもない開かれたメモリアルな空間で、“祈り―和解―希望”をテーマに野外音楽会〈いのちのハーモニー〉を持つ。

### 【組織活動方針】：「うたを広げ、歌って参加する人を組織する」

①各企画ごとに組織する合唱団づくりを企画部と共にすすめる。

②各地に出向き各地の活動と連携し、いっしょに歌って宣伝し、祭典参加をすすめる。

大小のうたう会、うたごえ喫茶、演奏会を計画的に開催する。  
③「祭典合唱曲集」「2005祭典歌集」などの作成に参加し、その歌集の普及をしつつ歌い手を増やしていく。

## Ⅲ.とりくみの展開

### □祭典運動スタート

呼びかけ人には、各界の幅広い分野で活躍されている方々25人から賛同いただき、祭典の広がりをつくるスタートとなった。

2月13日、全国祭典実行委員会（琵琶湖）で全国からのあついで期待と連帯の中で、基本方針案・企画案が大筋で承認された。

そこで出された意見・提案もふまえて、それぞれの音楽会でうたう歌・演目を確定していった。ピースウェーブコンサートのプログラムの中心には、広島で30年ぶりの全曲演奏となる「炎の歌」（土井大助詩、外山雄三曲）を置いた。

また、“被爆60年・いのち輝け 憲法九条『平和のうた』”募集の中から「へいわのうた」「ひとつのピース」が祭典曲となった。

3月から歌集づくりに入り、今までの「祭典歌集」に加えて、新たにヒューマンボイス8曲を中心にした「祭典合唱曲集」をつくり、1000人の大合唱をめざすこととした。

3月、賛同募金のとりくみに入り、全国・地元幅広く呼びかけた。賛同者の広がりやチケット組織につながることをふまえて、地域、団体別に指標を持ち、チケット販売開始前にと、6月末日を締切り日とした。実際には7月以後も続いたが最終的には広島は目標3000口に対して2613口、全国は目標2000口に対して2500口を超え、合わせて5100口を越え超過達成した。

### □至るところで「歌って宣伝」

とにかく「歌って参加」する人を増やそうというとりくみは、年明け一番「新春うたう会」（音楽茶房ムシカ、100人）から始まった。

3月、広島ではじめて開催された「九条の会」の講演会で祭典横断幕をひろげて歌っての宣伝し、教育基本法を守る集会では「ねがい」をふくむ合唱構成の指導を通して参加を訴えた。NPT条約再検討会議のニューヨーク行動には、企画委員長の高田龍治が日本のうたごえ代表団团长として参加し、現地のうたごえ行動で大いに力を発揮し、また、ひろしま祭典の大切なアピールの場とした。

5月、フラワーフェスティバル・マーガレットステージで演奏・宣伝し、7月には広島市の奨励する「水辺のプロジェクト」の一環として、「水辺のうたう会」を催した。元安橋東詰緑地帯のオーブンスペースで祭典横断幕をかかげ道行く人とともに、100人を超える人たちと歌い交わし広く祭典を呼びかけ、また、祭典中日の野外音楽会の雰囲気を感じさせる催しもなつた。

その他、NLP反対岩国集会、各区での平和まつり、網の目平和行進等々での歌って宣伝と賛同募金のとりくみが組織・宣伝部を中心に精力的に行われた。

#### □ピースウェーブ合唱団、うたう会

3月の広島合唱団50周年記念演奏会では、記念合唱団が組織され「アメイジング・グレイス」「子どもを守るうた」他を80余人でうたい、祭典への道筋をつけた。4月、市民公募のピースウェーブ合唱団の発会式には、「炎の歌」を歌う呼びかけの新聞記事を見た7人の参加者を含め72人が集まり、最終的に102人に達した。5月からは夏の「核兵器なくそう女性のつどい」の練習がはじまり、祭典で歌う「似島」「さくららよ」「ねがい」の3曲を芯にすえたオーブニング企画の指導を祭典祭典運営委員が担当し、広島多くの女性達に親しめるよう準備した。この間、県北の三次、県西部の福山で開かれているうたごえ喫茶、何年かぶりかで復活した呉市のうたごえ喫茶に、その都度実行委員会からも応援参加して、歌集の普及と祭典への「歌って参加」を宣伝した。

#### □ヒロシマの夏・ピースアクション

7月から8月にかけて、原水禁世界大会開会及び関連行事、全国保育合同研究会等数々の集会や大会が広島で開催された。これらの集いの文化企画の制作・練習指導、演奏への参加やミニコンサートを行いながら、祭典の宣伝と「歌って参加」への道筋を作り、方針を訴えていった。特に保育合研でのうたごえ交流会は100人の合唱隊、核兵器なくそう女性のつどいでのオーブニングは200人の合唱隊と子どもの遊ぶ姿もかわいい夢のあるステージとなった。また、福岡で行われた教育のうたごえ祭典、原水禁長崎大会等、全国のうたごえの仲間にはひろしま祭典への連帯を呼びかけた。地元での「歌って参加」の体制づくりや組織活動の実質は、この一連のヒロシマの夏・ピースアクションが発点となった。

#### □ヒューマンフェスタ《7つの川》プロジェクト

ピースアクションをうけて、祭典の柱に大音楽会に歌って参加しよう、と、ヒューマンフェスタ《7つの川》プロジェクトを立ち上げた。①和太鼓・生命の詩 ②核と世界の子どもたち ③生命をうたうダンス ④共に生きる街 ⑤子どもを守るうた ⑥ピース・9 ⑦ヒューマンボイスのチームがそれぞれ独自のプロジェクトとして動き始めた。（また、《7つの川》プロジェクトとあわせて「ねがい」プロジェクトを立ち上げ、NHKの取材に対応しつつ、大音楽会の「ねがい」の演奏の仕方等の検討をすすめていった）以下「共に生きる街」を例に、そのとりくみの一端を。

#### 【共に生きる街】

保育・医療・教育・福祉に携わる人々や高齢者・障害者・女性・子ども等、多くの階層の人たちが願いを一つにし生き支えあう「共に生きる街」をステージに実現しようとうたごえサークルや市内外でのうたごえ喫茶はもちろん、年金者組合・医療生協・女性団体・医労連・共同作業所・労働組合・保育合研等々、広く呼びかけ、地元の参加目標を600



人とした。

年金者たちは広島の高齢者大会で発信された「ときめく時間の中で」の、いくさの時代を過ぎて…に思いを込めた。医労連は悲願である広島県の子ども病院設立をねがう「生まれた命大切にしたい」を組合学習会で練習時間を確保した。保育士達はダンス「生命歌いましょう」とくみあわせて保育士仲間が創った「さくらよ」に力をそそぎ、作業所の仲間が自分たちの夢実現への意気込みを歌った「もつと高く」を手話つきで練習した。

祭典ステージでは全国からの年金者組合、医労連の仲間の応援を得て600人を越える「共に生きる街」合唱団が地元4人の指揮者を得て、いのちの賛歌を歌い上げた。

#### □ 広島のうたごえ祭典（9.23）

ピースウェーブ合唱団は「炎の歌」と「アメイジング！他8曲」の練習を積み上げ、ヒューマンフェスタ≒7つの川≒プロジェクトも軌道に乗った。

そして9月223日、広島のうたごえ祭典をこのプロジェクトの最初の集結点とし、祭典のイメージを具体的につかむシミュレーションの場とした。80人による和太鼓合奏「生命の詩」、120人の「子どもを守るうた」やピースウェーブ合唱団による「アメイジング・グレイス」、また祭典歌集を広めながらの「共に生きる街」ステージなど、参加者は「ああ、こんな風になるのか」「これはすごいことになりそうだ」などの感想を抱いた。なかでも和太鼓合同は指導者の今福優氏のなみなみならぬ熱意が子どもをふくめた80人の演奏者の真剣で迫力のあるステージを展開させ、参加者全員に祭典への意欲を喚起してくれた。

#### □ 「折り鶴」プロジェクト

東京のうたごえから発せられた「被爆から60年、ひろしま祭典に願いを込めた60万羽の折り鶴を持ち寄りましょう」に込めて全国で鶴を折るとりくみが展開され、この祭典にさまざまな思いで参集する人々の

心をつないでいった。広島では「折り鶴」プロジェクトを立ち上げ、その願いのこもった折り鶴で祭典を彩る「折り鶴・絵パネル」をつくるとりくみや11月6日8時15分に「折り鶴の日のつどい」をもち、千羽鶴を「原爆の子」の像に献呈した。祭典中に折り鶴は328992羽に達した。

#### □ 全国の参加運動

全国からの参加運動は、「うたごえ参加」を基本に3000人の目標でとりくんだ。1000人の大合唱「ヒューマンボイス」は、合唱曲集も3000を超える普及をやりきり、さまざまな講習会や合同練習会を積み重ね最終的に900人を越える登録が実現した。“この時に、この地で、この歌を、この指揮者で、1000人で”という企画の構想、選曲、指揮者の魅力が参加運動につながった。

各企画ごとの参加運動もブロック、県、合唱団単位での取り組みをすすめた。京都の“ピース9合唱団”や300人の「子どもを守るうた」などのとりくみを学びたい。

全体としては、近年最高の合唱発表会参加があつたにもかかわらず、大音楽会参加の目標は達成できなかった。今一度、大音楽会への参加運動を柱にした祭典の持つ意義を明確にしながら、各県ごとの“祭典プロジェクト”を確立し祭典運動を協議会の活性化、拡大・強化と結びながら取り組むことが求められる。

## IV. 組織宣伝、事業財政活動と運営体制

#### □ チラシ・ポスター、マスコミ関係

祭典チラシは、仮チラシ2万枚、本チラシ7万枚を印刷し、大音楽会の宣伝に絞ったチラシ一万枚も増刷し、カラーコピーのポスターも作り、各種コンサートや各種集会を中心に配付し、市内外の公共文化施設等、

最大限に活用した。

ピースウェーブ合唱団公募や、祭典に向けての記者会見を行い、また、コンベンションビューローと広島市文化財団発行「To You」に祭典の内容が紹介された。中国新聞、NHKローカルで祭典の取り組みを紹介。NHKは祭典翌日全国放送で「ねがい」の特集を放映。また、朝日新聞も報道した。また、終盤には主要な組合が機関紙に祭典記事を載せ、県労連は、FAXニュースで一斉送信を行った。

#### □祭典ニュース

祭典ニュース「相生橋」が週刊で6カ月間23回発行された。特にピースウェーブ合唱団では、「相生橋」はその活動の大きな指針となり、団員同士の、又サポーターや他の分野の運動とのつながりを知らせ深める役割を果たした。この「相生橋」と全国協議会発の「うたごえだより」は地元と全国の動きを結び励まし、支え合う力となった。

#### □チケット普及

チケット組織は8月後半から始まった。各種団体86カ所への配券と普及依頼。実行委員、呼びかけ人、PW団員及び各プロジェクトの出演者、OB、サポーター等、計310人に配券した。9月に入り再度、労働組合等へチケット普及の依頼。後半は大音楽会への地元3000人組織に目標をしばり「歌って参加」する人たちがその周辺に広げていくことを最大の手だてにした。広島のうたごえ祭典後の第5回実行委員会(105)では祭典成功への思いが熱く語られ、各サークル、地域の組織目標を明らかにして持ち帰り、以後は週報体制で祭典を迎えようと確認した。最終盤の週報体制で広がりをつくったが、「歌って参加」から、まわりへの人へのチケット普及が遅れもあって、目標には届かなかった。

#### □うたごえ新聞の役割と拡大

うたごえ新聞はもっとも近いサポーターに祭典を知らせる何よりの手だてであった。また、創刊50周年へ向けての読者拡大キャンペーンの

中で、年頭の祭典へ向けての広島スタッフの対談記事、コラム「くまさんのまっとるけーきんさいよ」や被爆地を案内する「ヒロシマシリーズ」など全国への発信記事が地元の未読者に働きかけるための大きな励みとなった。広島合唱団レセプション参加者、呼びかけ人、ピースウェーブ団員を対象とした拡大運動にとりくんだ。後半は特に地元祭典出演者への取材記事、指揮者からのコメント等が好評だった。

また、9月以後「ひろしまこの人」など、祭典準備側からの発信も宣伝効果を発揮し、05年1月より109人増で278人を達成した。

#### □事務局体制、事業・財政活動

選任スタッフ4人体制にボランティアスタッフを加えて事務局体制をつくり、実行委員会は8回もった。9月、作業券宿泊用に第2事務所を借りた。10月より昼夜食の炊き出し体制に入り、事務局員他の健康維持をとエネルギー補強に大いに貢献した。

祭典財政はチケット普及、賛同募金等のとりくみと共に、出版、Tシャツ、物産、ツアー事業で組んだ。チケット収入、ツアーが目標に及ばなかったが、賛同募金、プログラム販売及び広告収入、目標を超過達成し、物産販売、オプショナルツアー(ナイトクルーズ)が健闘した。

財政は、祭典の財産として直ぐとりくんだビデオの大普及の全国連帯活動で、わずかだが黒字で納めることができた。

## V.企画総括

#### □3つの音楽会

音楽会(ピースウェーブコンサート)は、全国祭典幕開けの歓迎演奏会であるとともに、被爆の記憶を綴り、平和のうたごえを響かせる音楽会となった。郷土色豊かに演じられた「音戸の舟唄」、太鼓構成「太田川」(劇団月曜会)をうけての益田遥バリトン独唱(『八月の歌I』他)、

村上弦一郎ピアノ独奏（『葬送』他）、平均年齢85歳のシニアコーラス「トワ・エ・モア」、そしてピースウェーブ合唱団「炎の歌」（猪原龍吉指揮、全国連帯による）は、95年以来つづけられてきたピースウエーブコンサートの財産を活かした企画・演奏であり、聴き手の胸を打った。また、全国うたごえ男声合唱団（『未来をかけて』他、守屋博之指揮）と浅井敬壹指揮による日本のうたごえ合唱団（『大地讃頌』他）はともに深い感動とあわせてうたごえの高みを刻んだ。フィナーレに歌われた「うたごえよ高らかに」（池辺晋一郎作曲・指揮）は今祭典の基調となるものだった。

野外音楽会（いのちのハーモニー）は、平和公園・元安川をはさんだ原爆ドームの対岸に舞台を移して、オープニング・アクト「献歌のつどい」（長崎・九州合同「平和の旅へ」等「団体」からはじまった。暮れなずむ川面にハンドベルの音が清らかに響きわたる頃には2500人の人々が兩岸いっばいにもやい（結い）の場をつくる中、被爆ピアノによる「月光」（村上弦一郎）の調べが流れた。ナターシャ&カーチャバンドゥーラデュオ（ウクライナ）の澄んだ歌声、金元中（韓国）の魂の歌声がドームをつつんだ。灯籠の灯が川面に揺れまたたき、歌びとの手に灯がともされ、そこに集う人すべてが唱和に加わった。「青い空は」（池辺晋一郎ピアノ伴奏）、そして「ヒロシマの有る国で」「折り鶴」「歌おう平和を」「故郷」。希望をつなぎ、いのちのハーモニーは地球を巡った。「3つの音楽会のうちでは、いのちのハーモニーが広島でやる祭典の特徴がきわだっていて、……心に深く刻まれた」との感想が寄せられた。

大音楽会（ヒューマンフェスタ）。「歌う人も観客も希いや思いを共有できる元気の出る素敵な空間だった」「この広島の地で、たくさんメッセージ溢れる歌や音楽を全国から参加された人たちとともに感じる事ができた祭典だった」「オープニングの雄大な太鼓、圧巻でした。そして、最後の『ねがい』の構成、大変感動しました」「共に生きる

街』の舞台、生きる勇気がわいてきます」「祭典も思いっきりうたい、1000人の大合唱の醍醐味を満喫しました」と感想にあるように、参加してともに歌い楽しみ、明日に希望をつなげる祭典となった。和太鼓、踊り・ダンス、歌の交流・交歓をとおして人間讃歌のうたごえが響きわたった。

プロローグ「生命の詩」の子どもも含めた160人太鼓によるいのちのほとぼしり。構成詩劇と歌で子どもたちに核のない未来をと被爆者とともに発信した第1部「ヒロシマ・ナガサキから世界へ」。舞台いっばいに保育・教育・医療・福祉・高齢者・青年・女性・障害者など世代や分野を越えた500人余の人たちがつながりあって生きる喜びを歌い上げた音楽構成「共に生きる街」と、この街の暮らしを根っ子で支えている「希望の憲法・第九条」に光をあてた第2部。

そして第3部、8人の指揮者の共演で8曲を演奏する「明日へのヒューマンボイス」は1000人の大合唱となり、深く静かなドラマを生んだ。壬生の花田植、韓国民族芸能「サムルノリ」、山陽女子のバトントワリングに魅入り心躍らせた。そしてエピローグ「平和こそ未来」。ゲストのきたがわてつ、ナターシャ&カーチャ・グジー、金元中に、大州中学校の生徒たちも加わって全員で歌われた「ねがい」で会場は一つに結ばれた。

3日間にわたるひろしま祭典は、“被爆60年 輝けいのち・憲法九条”を各音楽会の基調として、ひろしまの心を「声をひとつに、ヒューマンボイス」と熱く歌い交わした祭典となった。それは、“うたごえは平和の力”を体現した「胸あつくなる祭典」だった。

振り返れば、祭典運動の期間は短く体制は不十分だった。その意味からもこの祭典の成功は、聴衆と歌い手、舞台スタッフに支えられてのものだった。合唱発表会で歌いきることの充実感・達成感と祭典（大音楽会等）で歌いかわすことの喜び・醍醐味が共に味わえるうたごえ祭典。その祭典の柱が大音楽会であることを思えば、大音楽会への、ことに大合唱への参加人数の確保遅れが舞台づくりに影響を与え、当日のスタッ

フ態勢の努力に負うところが大きかったこと、また、歌う側がさいごまで歌いきって（聴く側も集中が途切れることなく聴けて）その感動を持ち帰られるよう、終演時間を厳守した企画構成と進行に努めること、そして、大音楽会にふさわしく会場全体と交歓できる企画を工夫すること、の3点を大きな反省点としたい。

## VI.おわりに

広島開催の話が持ち上がって1年半、実行委員会が立ち上がって10ヶ月、時間的にも人的にも体制が充分でない中での取り組みであったが、この間の広島のピースウェーブコンサートの蓄積と全国の平和のうたごえの広がり或被爆・戦後60年の節目の年にふさわしい内容で成功させることができた。

私たちは、この祭典を取り組む中で、広島のうたごえ運動をどう活性化させ躍動させていけるか、その展望を見出すことでもあった。その取り組みの母体はうたごえ協議会であり、この祭典でも運営を常にリードし、「歌って広げる」取り組みの中心でもあった。

地元の「歌って参加」の運動を地域に根ざした広げる運動につなげていく活動、全国の歌って参加の運動の広がりをつくることでの課題は残した。

祭典運動を通して、この取り組みで蒔いた種、積み上げてきたものをこれからどう発展させるかが見えてきた。

祭典のフィナーレで「うたごえよ 高らかに」と、そして「ねがい」にこめた平和への思いは被爆地から世界へ大きく発信された。

うたごえは未来を拓く。ワクワク・ドキドキ、その興奮と感動でもっと多くの人とつながっていくために、これからの10年をスタートさせたい。

**輝け憲法九条！うたごえは未来を拓く**  
うたごえ60周年に向かう3カ年計画と06年

## 活動方針

「平和で健康なうたを全国民に普及することを目的」とした私たちの運動は、国民自身が文化（音楽）の担い手（主人公）として、運動を展開し、2008年には60周年を迎える。1946年に公布され60歳を迎えた憲法は、戦争を放棄し、国民一人ひとりを大切にして、平和な未来を約束する道しるべとなった。

しかし、今、永久にと約束した「戦争放棄」を「平和放棄」の法規に変えようとする改憲勢力の策動が激しさを増し、国民投票法案まで出そうとしている。

うたごえはその渦中で60周年を迎える。

私たちは、再び戦争の惨禍をくり返さないと国中に全世界に宣言した日本国憲法をもった国の主人公として、9人のよびかけ人による「九条の会」アピールに応えて集う「九条の会」の人たちと結び、すべての人々が平和のために声を上げていく活動をうたを通して、音楽文化を通して旺盛に展開したい。

その60周年に向かう3カ年計画と06年方針をもって活動をすすめてい

### 1、60周年に向かう3カ年計画

①憲法改悪を許さない国民過半数の運動と結び、2056市区町村めぐり、わが町・わが暮らしに、憲法九条をまもる平和をのうたごえをつくり、響かせる。

・この間、全国で合唱発表会に参加して1000近いサークル・合唱団が「九条を守る平和うたう会」（仮称）を1回以上開催し、九条、九九条にちなみ、〃999（スリーナイン）カ所・平和うたう会〃運動をおこす。

・歌集「輝け憲法・うたうたうた」（仮称）をみんなでつくり、みんなで広げる。（目標99900部）

・音楽・九条の会を全国に広げる。あわせて、60周年までに全市町で〃みんなうたう会〃の計画を持った実践をすすめる。

・〃みんなで創り歌う〃創作活動、演奏・創造を豊かに発展させる

②この広がりを各地のうたう会、コンサート、うたごえ祭典等に実らせ、06年ふくい・北陸、07年奈良、08年東京の日本のうたごえ祭典を成功させる。

③うたごえ祭典と合わせ、演奏交流の場であり、うたごえを広く大きく進めていく力となる合唱発表会運動を活発にし、60周年までに合唱発表会の全県開催と1300の参加団体にする。

④演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめ、21世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる

⑤平和のうたごえ発信〃うたごえ発ジャーナル〃の役割を一層輝かせ、うた新フォーラム全県開催と史上最高の読者を迎える。季刊「日本のうたごえ」の加盟員全員購読を積極的にすすめる。

⑥全市町にサークル・合唱団を、加盟を500団体に、協議会をつくり強化する。

⑦和太鼓と民謡・民舞のネットワーク化とシステム化を促進する。

⑧アジア、世界への視点で60周年に向かう国際交流の輪を広げる

⑨運動創立60周年記念レセプションを08年2月総会時に開催する。

## 2、06年活動方針

方針へ1）人々のねがいと結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、〃みんなうたう会〃を旺盛に展開し、〃共に生きる町づくり・地域づくり〃のうたごえを広げる。

◆〃いつでもどこでもうたごえを〃を合言葉に一人・合唱・器楽・和太鼓と民謡・民舞：多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びをひろげる。

・サークル・合唱団が「九条を守る平和うたう会」（仮称）を1回以上開催し、九条、九九条にちなみ、〃999（スリーナイン）カ所・平和うたう会〃運動をおこす。

・まず、自らが九条の会に入り、サークル・合唱団で九条の会を作り、幅広い音楽家・音楽愛好家とともに音楽九条の会を作り、地域・分野の九条の会との連携を深めた「講演と音楽の夕べ」等創意的活動を展開する。

◆すべてのサークル・合唱団は旺盛な演奏普及活動を行い、60周年計画をもって〃みんなうたう会〃を開く

・人間らしく生き、働くために、働く者のうたごえを地域・職場から

共に起こす。

※「みんなうたう会」は「いつでもどこでもうたごえを」様々な形態、内容、場所でうたい広げる活動を総称して言う言葉

◆多くの人が「こぞうたごえを」愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

・歌を創り、生まれた作品を歌い、その中でよりよいものをつくりあげていく、「みんなのでつくり歌う運動」をひろげる。

・「日本のうたごえ創作センター」の機能を充実させ、創作活動家を生み出し、創作活動と作品交流を進展させる。

・3月31日～4月2日開催の全国創作合宿を内容・参加運動とも成功させ、憲法をまもり生かす歌づくりを積極的にすすめる。

◆歌う喜びを出発点に、いのちや音楽の輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を進展させる。

**方針〈2〉** 地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い創造の前進をめざす合唱発表会にする。

・合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせ、さらに改善を進める。

・新しいところに積極的に呼びかけ、開催の仕方、運営を工夫し、多彩な音楽活動が交流できる合唱発表会をつくる。合唱発表会・交流の部を今年度も開催する。

合唱発表会参加団体今年度100団体増の目標を持ち、未開催県の今年度開催計画を持つ。

**方針〈3〉** 地方祭典の全県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

◆うたごえを起こし、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、うたごえ祭典の新たな前進をめざす。

◇「2006年日本のうたごえ祭典」は「ふくい・北陸」を全国の連帯で成功させる。

◇地方祭典の全県開催の具体的計画をもつ。

◇日本のうたごえ祭典開催計画は06年～福井、07年～奈良、08年～東京で日本のうたごえ祭典を開催する。

09年以降の祭典計画を祭典プロジェクトで検討案をもつ。

**方針〈4〉** 歌の広がりをうたごえ新聞読者につなぎ、豊かな「うたごえ発ジャーマル」を確立する。

・読んで魅力を伝え、結びつきを広げ、読者になつてもらう。読み、つくり、広げるを合い言葉に紙面の中からたくさん運動の財産を学び、創造・組織の力にする。

うたごえ新聞を各地で計画的にすすめる。

**方針〈5〉** うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる。

すべての協議会加盟団体に事業部担当を置き、事業普及活動を活発にすすめる

◇多様な「みんなうたう会」に役立つ歌集を発行し、旺盛な普及活動をすすめる。

**方針〈6〉** 演奏・創造を進展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる。

せる学習・教育をすすめ、21世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる

それぞれの合唱団、サークルでの教育を日常の練習や実践の中で行うことを重視するとともに系統的に各種講習会への参加を強める。経験あるリーダーにつづく、中堅、若手リーダーが力を発揮し育っていきけるように協議会でも計画的にすすめる。演奏・創造活動を豊かに発展させ交流し、批評活動や運動の理論活動をすすめる、力にしていく。

◇サークル・合唱団の参加を強め、全国講習会を成功させる。

◇教育・学習運動を活発にし、21世紀の運動を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

◇日本のうたごえ祭典参加の企画に合わせた全国祭典合唱団、日本のうたごえ合唱団の参加を強め、日本のうたごえの創造的前進をめざす。

◇指揮者・合唱指導者連絡会等、教育システムの組織化をすすめる。

**方針へ7** 青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、21世紀を担う青年をたくさん迎える。

◇青年の持っている多様な要求に敏感に目を向け、仲間づくり、サークルづくりと団体・分野を超えたネットワークづくりを強める。

◇「運動する力」「音楽する力」をつける「学びの場」を系統的につくる。

◇青年学生部を充実させ、全国を視野に入れた青年のうたごえの連帯を強める。

◇初めて開催される「全国青年のうたごえ祭典 in Tokyo of フォルター大きくうたえー」（仮称）を成功させる。

**方針へ8** サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会を強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やし、合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」の読者を増やすことを目標を持って計画的にすすめる。

◇合唱発表会参加団体を100団体増、県うたごえ協議会の確立目標を持ち、新加盟団体今年度40団体に。

◇うたごえ新聞新読者を1000人増やし、60周年に最高時読者を迎える展望をもち、季刊「日本のうたごえ」新読者を150人に。

**方針へ9** 世界の音楽家、音楽団体との国際交流を広げる

アジア、世界への視点で60周年に向かう国際交流の輪を広げる。

**方針へ10** 和太鼓と民謡・民舞のネットワーキ化とシステム化を促進する

専門家との協力協同、全国講習会の充実、郷土センターの設立、郷土教育者の組織化・メニュー化、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりにつながる活動を計画を持ってすすめる。

和太鼓・民舞仲間をうたごえの輪の中に迎えるとりくみを強める。

## ◆2006年主な年間活動

①日本のうたごえ祭典Eふくい・北陸 11月3日(金)～5日(日)

②地方・産業別合唱発表会

計画的に早めに準備する。合唱発表会は10月1日までに終了

③産業別うたごえ祭典・交流会

港湾

教育 8/26～27日 新潟

郵便 未定 大阪

医療 10月 東京

国鉄 9月9～10日 福島

保育 9/月23～24日 東京

自治体 未定

電通 9月16～17日 岡山

私鉄 未定 東京

青年 8月25～27日 東京

④全国講習会

全国合唱指導・指揮講習会

6月16～18日 長野・松本

西日本合唱講習会

4月29～30日 石川・金沢

東日本合唱講習会

5月13～14日 東京

西日本郷土講習会

福井

東日本郷土講習会

5月3～4日 神奈川

第5回全国創作合唱

3月31日～4月2日 宮城・秋保温泉

⑤3・1ビキニデー

2月27日～3月1日 静岡

⑥原水爆禁止世界大会

8月4～6日 広島 8～9日 長崎

⑦第52回日本母親大会

7月22～23日 長野

⑧日本平和大会

12月上旬 山口、広島

## おわりに

私たちは、戦争放棄を高らかにうたった平和憲法・九条を礎として「うたごえは平和の力」として活動し、「人々の生活と闘いを創造の源泉」として歌を作り、広げ、2008年には、うたごえ運動60年を迎えようとしている。

今、その憲法が大変危ない状況におかれている。改憲勢力は、今年を照準に国民投票案も出し、マスメディアを通しての憲法を変えるべきという世論づくりをすすめ、「戦争をできる国」に突き進もうとしている。しかし、この憲法改悪の路線は、国民の平和を求める願いと矛盾を深めており、国民が力を合わせれば新たな平和の流れをつくり出すことは可能である。

世界でも、アジアでも国際秩序に基づく平和の流れこそ本流となつて



いる。

私たちももう一度、なんのために今自分は歌っているのか、それを問い直し、「日本国憲法を持つ国の主権者として、九条を選び直し、使っていく」(『九条の会』アピール)活動を、一人から一人へ、サークルで、さらに地域、職場へと広げていきたい。

憲法九条をまもる運動を軸に憲法を輝かせ、「戦争の国づくり文化」から「平和の国づくり文化」創造への転換をめざす、文字どおり「平和で健康なうたを全国民に普及する」を大きく展開して、60周年に向かう3カ年計画を進めていきたい。